

『北方圏学術情報センター年報』第3号の発刊に寄せて

北翔大学 学長 相内 眞子

「北方圏学術情報センター年報」第3号が発刊の運びとなりました。本センターが研究資産の生産基地として多くの研究員を招き入れ、活発な稼働状況にあることの証として、本号の発刊を嬉しく、また誇りに思います。

本誌に掲載された論文や報告、また作品等は、2008年7月から2010年3月までの2年半に及ぶ研究成果の集大成であり、昨年刊行された本誌第2号に発表された研究成果をさらに発展・深化させた内容になっています。研究員の方々の真摯な研究姿勢と公表への努力に心から敬意を表するものです。

さて、生活福祉・生活文化の向上を目的に、本センターが包括する研究領域の幅と奥行は、実に広くかつ深く、それによって、研究対象の自由な選択と、対象への多様なアプローチが可能であることは、高く評価されてしかるべきでしょう。しかも、自由と多様性の保障は、本センターが志向する研究の統合的展開を脅かすものでは決してありません。目次をご覧いただければおわかりのように、すべての研究が、人間社会の観察と分析を通して「福祉=幸福」の実現を目指した実践的アプローチであり、その成果であるということです。

折しも、東日本大震災がもたらした深刻な影響が、日本社会の根幹を揺るがしつつありますが、そのような中であって、「生活環境、地域福祉、心の健康、生涯学習としての芸術などの分野について総合的かつ学際的な視点から研究を行う」本センターの意義は、弥増すといえるでしょう。すなわち、音楽や動物を介した安らぎへのアプローチ、多様な背景をもつ、子ども・学生・大人たちの心に寄り添うサポート、身体機能を科学する試み、哲学と対峙するアートや、アーティストギャラリーへの誘い（いざない）、人と社会を繋ぐ「公」について、さらに、宗教空間が伝える建築家のメッセージ、外国資本が本道観光地に与える影響、啄木への理解と共感、写真で見る四季の移ろいや、温かなマーブル染め……。すべての研究が、「人をより豊かで幸福にする社会の実現」に向けて動機づけられているように思われます。

「幸福でありたい」という、私たちの素朴な願望が、あからさまに拒否され、夢や希望といった言葉も力を失いつつある現在、北方圏学術情報センターが志向する研究目的とその研究成果が、「人を支え人に支えられる福祉社会」の手応えを実感させ、この困難な時代状況に応える意味と意義をもつことを確信しています。